

2010年4月13日
郵便局株式会社 東北支社**オリジナルフレーム切手「青春の寺山修司」の販売を開始します**

郵便局株式会社 東北支社（仙台市青葉区一番町1-1-34、支社長 上田 伸）は、下記のとおり、オリジナルフレーム切手の販売を開始します。

記

1 切手の概要

名 称	青春の寺山修司
販売開始日	2010年4月23日（金）
販売部数	1,000部（予定）
販売郵便局	青森県三沢市、八戸市、十和田市、上北郡、三戸郡内の全郵便局 （簡易郵便局を除きます） 計90局
商品内容	（1）オリジナルフレーム切手（80円切手×10枚）B5サイズ 1シート （2）切手解説書 1部
販売単位	上記商品内容を1セットとして販売します。
販売価格	1セット 1,400円

2 切手デザイン等
別添のとおり

3 その他

本フレーム切手は、4月25日（日）より郵便局ホームページ「郵便局の通販ショップ」でもお取り扱いします。（<http://www.postal-jp.com/psc/goods/index.html>）

なお、「郵便局の通販ショップ」でお取り扱いするフレーム切手には販売価格（1,400円）のほかに郵送料等が加算されます。

以上

【報道関係の方のお問い合わせ先】 郵便局株式会社東北支社企画部（広報担当） 電話：（直通）022-267-7354	【お客さまのお問い合わせ先】 郵便局株式会社東北支社営業本部（郵便担当） 電話：（直通）022-267-7666
--	---

解説書イメージ



青春の 寺山修司

〈資料提供〉
テラヤマ・ワールド/寺山修司記念館/寺山映子

小学校4年から中学2年までの多感な少年時代を三沢で過ごした寺山修司は、昭和24年夏、母が九州に働きに行くことになり、青森市の親戚が経営する映画館・歌舞伎座に引き取られる。そこで見た映画や芝居は、その後の寺山作品に色濃く影響を及ぼす。転入した野脇中学校で、京武久美と出会い、その影響で俳句を作ることになる。続いて進学した青森高校では、青森高校文学部会議を組織し、京武、近藤昭一、塩谷律子らと「魚類の薈薇」「麦唱」「青い森」などを発行。全国の高校生に呼びかけ「初めての十代の俳句研究誌」「牧羊神」も創刊した。昭和29年4月早稲田大学教育学部国文学科に入学。18歳の寺山修司は「チェホフ祭」で短歌研究新人賞特選を受賞し、歌壇に鮮烈にデビューする。学生時代、ネフローゼで入院生活を余儀なくされるも、「短歌研究」編集長であった中井英夫の好意で昭和32年に、作品集「われに五月と」、詩集「はだしの恋唄」と刊行した。退院後、寺山修司の創作意欲は堰を切ったようにジャンルを超えて溢れ出す。俳句、短歌、詩の世界から、ラジオ、テレビ、映画、演劇と拡大し、「演劇実験室◎天井桟敷」創立に向かうのである。

切手説明

①	②		
③	④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨	⑩

- 寺山修司の恩師、中野トクに宛てたはがき（昭和31年8月30日発行）
- 「牧羊神 VOL.7」（昭和33年1月31日発行）
- 「短歌研究」編集長であった中井英夫に宛てたはがき
- ネフローゼから退院後の寺山修司（昭和33年）
- 青森高等学校文化祭作品集「麦唱」の麦唱詩集の冒頭にある詩（昭和27年10月5日発行）
- ネフローゼで新宿区にあった社会保険中央病院に入院中のスナップ写真（昭和30年）
- 早稲田大学入学直後の寺山修司（昭和29年）
- 寺山修司記念館の展示引き出しの一部
- 青森高校時代のスナップ写真
- 「牧羊神」の同人であった山形幾次郎に宛てた年賀状

〈切手シート上部写真〉
二原修司で撮影された「演劇実験室◎天井桟敷」創立時の人々（昭和42年/撮影：田岡一忠）
〈切手シート上部右下の写真〉
九州の母へ宛てた手紙の一部（昭和24年/15歳）

寺山修司略年譜

- 1935（昭和10年）0歳
12月10日、寺山八郎、寺山はつ子の長男として青森県弘前市相屋町に生まれる。
- 1945（昭和20年）9歳
青森市大塚で養育される。三沢駅前、父方の伯父の営む「山倉堂」の二階に借宿りする。
- 1948（昭和23年）12歳
三沢の古閑木中学校に入学。
- 1949（昭和24年）13歳
青森市の母方の叔父夫婦（映画監督歌舞伎座を経営）宅に引き取られる。
- 1951（昭和26年）15歳
青森高校に入学。新聞部、文芸部に参加する。
- 1954（昭和29年）18歳
早稲田大学教育学部国語国文学科に入学。「チェホフ祭」で第二回短歌研究新人賞受賞。
- 1955（昭和30年）19歳
ネフローゼを患い、新井の社会保険中央病院に生活保護を受けて入院。
- 1955（昭和30年）22歳
第一歌集「ウ」は本一の場合「原」刊。
- 1960（昭和35年）24歳
長編戯曲「血は立つなまを眠っている」を劇団四季にて上演。藤口正浩監督の長編映画「続いた湖」のシナリオを書く。
- 1963（昭和38年）27歳
九條映子と結婚。現代の青春論（三冊）と題して「家出のすすめ」をまとめる。
- 1967（昭和42年）31歳
構屋忠則、東内多雄、九條映子らと演劇実験室「天井桟敷」を設立。
- 1969（昭和44年）33歳
渋谷に天井桟敷及び地下小劇場落成。作詞したカルメン・マキの「母には母のない子のように」が大ヒットする。
- 1972（昭和47年）36歳
ミンヘン・オリンピック記念芸術祭にて、野外劇「走れメロス」を上演。
- 1974（昭和49年）38歳
長編映画第二作「田岡に死す」（宝冢音楽劇新人賞）を脚本、監督。
- 1975（昭和50年）39歳
東京・杉並区で市街劇「フック」上映中、警察が介入。新聞の社会面をにぎわす。南仏ツールの「若い映画」祭でマルグリット・デュラスと共に審査員をつとめる。
- 1976（昭和51年）40歳
渋谷の天井桟敷劇場跡、新たに元麻布に劇場。
- 1982（昭和57年）46歳
長編映画「さらば鳩舟三郎本」監督で沖浦口ケ。谷川俊太郎とビデオレターの交換をはじめ。
- 1983（昭和58年）47歳
絶筆となったエッセイ「墓場まで何マイル？」を書く。5月4日午後0時5分、肝硬変と胆管炎のため敗血症を併発、死去。享年47歳。